

太田殿女房御返事

建治三年十一月十八日 五六歳

柳のあをうらの小袖、わた十両に及んで候か。

此の大地の下に二つの地獄あり。一には熱地獄。炭起すみををこし、野に火をつけ、
せうまうの火、鉄くろがねのゆのごとし。罪人のやくる事は、大火に紙をなげ、大火に木かなくづ
をなぐるがごとし。この地獄へは、焼盗と、火をかけてかたきをせめ、物をねたみ
て胸をこがす女人の墮つる地獄なり。二には寒地獄。此の地獄に八あり。涅槃經に云は
く「八種の寒氷地獄あり。所謂阿波々地獄・阿吒々地獄・阿羅々地獄・阿婆々地獄・
優鉢羅地獄・波頭摩地獄・拘物頭地獄・芬陀利地獄」云云。此の八大寒地獄は、或は寒か
んにせめられたる声こえ、或は身のいろ等にて候。此の国のすはの御いけ、或は越中のたて
山北のかへし、加賀の白山嶺のれい鳥のとりのはねをとぢられ、やもめをう女な襦のす冷そのひゆる、
ほろ雉の雪にせめられたるをもて知しろしめすべし。かんにせめられて、を頤とがいのわな
めく等を阿波々・阿吒々・阿羅々等と申す。かんにせめられて、身の紅くれない似にたる
をく紅蓮・大紅蓮等と申すなり。いかなる人の此の地獄墮にをつるぞと申せば、此の世にて
人の衣服をぬすみとり、父母師匠等の寒さむげなるを見みまいらせて、我はあつく暖あたかに
にして昼夜をすごす人々の墮つる地獄なり。

六道の中に天道と申すは、其の所に生ずるより衣服調とのをりて生まるとところなり。
人道の中にも商那和修・鮮白比丘尼等は悲母の胎内より衣服調とのをりて生まれ給へ
り。是はたうとき人々に衣服をあたへたるのみならず、父母・主君・三宝清にきよくあつ
き衣をまいらせたる人なり。商那和修と申せし人は、裸形らなりしびやく辟支仏きぬに衣をまいら
せて、世々生々に衣服身に随ふ。橋曇弥きょうどんと申せし女人は、仏金にきんばら衣をまいらせ
て、一切衆生きけんぶつ喜見仏となり給ふ。今法華經に衣をまいらせ給ふ女人あり。後生には八寒
地獄の苦をまぬがれさせ給ふのみならず、今生には大難私をはらひ、其の功德のあまりを
男女公のきんだち、きぬ衣にきぬ重をかさね、いろ色にいろをかさね給ふべし。穴賢あなかしこ穴賢。

十一月十八日

日 蓮 花 押

太田入道殿女房御返事